「人文科学研究会（言語学）副専攻論文」

意味の変化と意味のずれ～原義から転義へのメカニズム～

川原万由子

1　はじめに
2　日本語における時代間の意味の変化
3　言語間の意味のずれ
4　まとめ

1　はじめに

言葉は主として情報や感情を人に伝えるための道具である。そのため、言葉にする時点で話し手の話題（内面や意図したこと）は、相手との共通認識のある「言葉」に変換されて、表現される。

「言葉」は他者が認識できるよう、共通言語に翻訳されているようなものだから、話し手の主観とは厳密にいえば微妙に異なる。どんなに言葉を尽くしたとしても、話し手が思い起こしたことや認識したことと完全に一致したものを表すことはできない。ましてや受け手によって、言葉から認識することも微妙に異なるため、伝えようとしたことを十全に一致する形で伝えることもできない。

言葉
↗変換　　↘変換
話し手　　受け手

一方、言葉があるから認識できるものもあり、思考できることもある。語彙の豊富さは時に写真の画素数にたとえられる。

そして、言葉が使われていくうちに意味を変えたり、新たな意味が加わったりすることがある。初めは、はやり言葉や誤用とされていても、時を経て定着し、多用され、主たる意味が変わることもある。

また、同じ意味内容を有すると思われる表現でも、言語によって性質や用法が微妙に異なることもある。

以下、日本語における過去から現代にかけての意味の変化、及び同じ意味の言葉の言語間の違いについて述べる。

2　日本語における時代間の意味の変化

同じ言葉でも、時を経て意味が減ったり、派生して増えたりして意味がずれることがある。

(1) 古語と現代語

言葉は人間の営みと密接不可分であるため、「物忌み」や「方違え」のように、文化の喪失とともに使われなくなった言葉もある。また、言葉が現代に残っていても意味が増減したり変化したりする場合もある。

今回は後者に着目し、古語と現代語を比較して、ある語の意味が文字通りの意味から慣例上の意味へと変化することをみる。

尚、以下の古語説明は「旺文社　古語辞典　第十版」(松村昭、山口秋穂、和田利政(編)、旺文社　2011年)と「ビジュアル図解　古文単語」(池田修二　学研教育出版　2011年)による。また、現代語の説明は「角川　必携国語辞典」(大野進、田中章夫(編)、角川書店　平成17年12月10日　八版)による。

ア　意味が減ったもの

意味の減少も過去と現在とでの意味のずれの一つである。

(ア) 動詞

動詞の場合、古語では動きと心情の双方を表す意味を持っていたが、現代語においては心情を表す意味しか持たないというずれが見られることがある。

例)

(1) かしこまる(畏まる)(動詞)

古語：①恐れ敬う。恐縮する。
②詫びる。謝罪する。
③(とがめを受けて)謹慎する。
④きちんと座る。
⑤礼を言う。
⑥謹んで承る。

現代語：❶きちんと正座する。(④)
❷謹んで命令をうける。(⑥)

(2) したふ(慕う)(動詞)

古語：①心が惹かれて後を追う。(物理的に)
②恋しく思う。懐かしく思う。
③(理想的な状態・人物などに)なりたいと願い求む。
④優れた人物について学ぶ。師事する。

現代語：❶人に知らせないで心の中で相手を追い求める

❷心になつかしく思う。(③)

❸その人物の徳や学問を尊敬し、それに親愛の感情を抱く。(②)

（1）は、元は、上で示した番号の④の意味であったが（以降、古語の意義は白丸数字①等で、また現代語の意義は黒丸数字❶等で表記する)、④の姿勢で行うこととして②⑤⑥が、④の時の心情として①が生まれた。そして、②の派生として③の語意も生じた。

④から②⑤⑥、④から①の意味の広がりは、「きちんと座る」という行為とそれに伴う行為や心情の近接性に注目したメトニミーによるものであろう。

なお、現代語の意味は、辞書には上記❶❷しか記載されていなかったものの、近年では、①の意味で用いることも多い。(例　サークルの先輩が、堅苦しい敬語を使う後輩に「そんなに畏まらないでいいよ。」と言う。) 古語同様、❶の行為とそれに伴う心情の近接性に注目したメトニミーが改めて生じているのであろう。

（2）は、古語も現代語も、心が惹かれる点はどの意味でも共通している。そして、懐かしんだり憧れたりして精神的に後を追う②③も❷❸として古語と現代語に共通して今に残っている。

もっとも、物理的に相手を追う①④は消え、他者に対する思いを内に秘めるニュアンスが強くなり、密かに精神的に相手を追い求める❶としての意味が生まれている。また、自らが理想的な状態になりたいと望む③と、相手を尊敬する❸は理想的な状態が関わる点は共通しているが、心情の方向が自分に向いているか相手に向いているかが異なる。

（イ）形容詞

形容詞の場合、古語では指示対象の状態と心情の双方を表す意味を持っていたが、現代語においては心情を表す意味しか持たないというずれが見られる場合がある。

例)

(3) あやし（形容詞）

古語：①（奇し・異し・怪し）

ア　霊妙だ。神秘的だ。

イ　異常だ。不思議だ。並々ならない。

ウ　奇妙だ。奇怪だ。

エ　珍しい。見慣れない。風変わりだ。

オ　疑わしい。不審だ。

カ　気がかりだ。不安だ。

キ　けしからぬ。ふつごうだ。

②（賤し）

ア　見苦しい。むさくるしい。みっともない

イ　身分が低い。いやしい。

現代語（怪しい）：❶様子がおかしい。ふだんと違い異様な感じがする。気味が悪い。

❷疑わしい。

❸信用できない。

❹男女間について、秘密の関係があるらしい。俗な言い方。

❺ふしぎにひきこまれるような魅力のあるようす。「妖しい」とも書く。

❻悪い状態になりそうである。

(4) つらし（辛し）（形容詞）

古語：①辛抱しにくい。難儀だ。心苦しい。辛い。

②不人情で嫌だ。思いやりがない。薄情だ。

現代語：（辛い）❶がまんするのがたいへんに苦しい。

❷他人へ態度にやさしさがなく、冷たい。

(5) たのし（形容詞）

古語：①（肉体的・精神的な面で）快く喜ばしい。満ち足りて愉快である。楽しい。

②（物質的な面で）豊かである。裕福である。

現代語：（楽しい）❶生物として満足感がある。明るい気分である。

（3）は、元は①イウに近い、自分に理解しにくい異様なものを不思議に思う気持ちだが、貴人にとっては自分たちの世界とは直接関係のない身分の低いもの、粗末なものはその正体がわからなかったため、②の意味が生じた。もっとも、現代においては、もはや②の意味は残っていない。[1]

（4）は、古語でも現代語でも精神的な苦痛を意味する①❶は共通している。

もっとも、古語では、自分に対する相手の仕打ちによる精神的苦痛という意味であったものの、現代語においては原因を問わず広く耐え難い精神的苦痛を指す。[2]

また、現代語では、❷の使い方をするときは、「～に辛く当たる」という特定のイディオムで見かけることが多く、「辛い」という言葉のままでは用いないように思う。

（5）は、古語と現代語におけるどの意味でも満ち足りている状態である点は共通しており、その上で肉体的・精神的なものか物質的なものかで①と②に分かれていた。[3]

現代においては❶として①のみが残っている。

---

[1] 池田修二『ビジュアル図解　古文単語』（学研教育出版、2011 年）p.29

[2] 前掲書 1　p.35

[3] 前掲書 1　p.43

（ウ）名詞

例）

（6）ひま（隙・暇）（名詞）

古語：①すきま。

②時間。時間のゆとり。

③絶え間。

④良いきっかけ。都合の良い機会。

⑤仲たがい。不和。

⑥心の好き。油断。

⑦主従又は夫婦の関係を断つこと。長のいとま。また、休暇。

現代語：❶必要な時間。

❷用事や仕事のない時。

❸主従・雇用などの関係をやめること。遠回しな言い方。

（7）けしき（気色）（名詞）

古語：①心のうちが外に現れるさま。また、その心のうち。ようす。そぶり。顔色。態度。機嫌。

②心のうちを内々に示すこと。内意。意中。意向。

③特別に目をかけること。寵愛。

④自然界のあり様。景色。

⑤（物事の起こる）きざし。兆候。

⑥深く心をうつおもしろさ。おもむき。情趣。

⑦（「けしきばかり」の意で）ほんの少し。いささか。

現代語：（景色）山・川・海など、自然の眺め。

（8）はかなし（果無し・果敢無し）（形容詞）

古語：①長続きしない。あっけない。

②はっきりしない。定まらない。頼りない。

③（将来や前後をわきまえず）考えが浅い。分別が足りない。おさない。たあいない。

④たいしたことでない。格別のこともない。取るに足りない。つまらない。ちょっとした。

⑤なんにもならない。価値がない。無益だ。

⑥情けない。あさはかだ。

⑦きちんとしていない。まともでない。

現代語：（儚い・果敢無い）確かなところがなくて、あてにならない。あわくて消えやすい。

(9) ふるさと（名詞）

古語：①昔の都。昔何かあった古跡。旧都。

②以前に住んだり、行ったりしたことのある土地。なじみの土地。

③自分の生まれた土地。こきょう。

④留守にしてきた我が家[4]

現代語：（古里・故里・故郷）生まれ育った土地。こきょう。

（6）は、元の意味は空間的なすきまを指す①であったが、時間的なすきまを指す②③、心理的なすきまを指す⑤⑥⑦、⑥の派生として（相手に油断が生じたことによる）絶好の機会である④と意味が広がった。[5]

現代語では時間的な隙間のみを指し、古語における「ひま」のように広く時間的・空間的・精神的な隙間は「隙間」と呼んでいる。雇用関係をやめることにより、相手に仕事のない時（❷）が生まれるため、婉曲表現として使われるうちに❸の意味ができた。

（7）は、主に視覚的に目の前ものから直接受ける様子をあらわす。①から②③が派生した。④のみが現代語においても残っている。①等の心理的な意味は「気色ばむ」という言葉で現代に残っている。風景は景色、顔色は気色と感じが分かれて区別されていったのかもしれない。

※気色ばむ：むっとして、いかりを顔にあらわす。

（8）は、「はかなし（い）」の「はか」は「はかどる」「はかばかしい」と同様に目当て・目標・結果のことを指す。そのため、もともとは目当て・目標・結果がなく、不確かでむなしく内実がないという意味を持つ。対象によって意味が分岐し、存在に内実がないとして①②、価値に内実がなく③④⑤、その派生として⑥⑦になったと考えられる。

④の「ちょっとした」は、肯定的に、見かけによらずちょっとしたものだ、というような使い方をする場合もある。

辞書では全体的に否定的なニュアンスの意味が掲載されているが、現代では、「儚げ美人」「儚いスイーツ」というように、可憐で繊細といった肯定的な意味も併せもっている。

（10）は、「以前、そこを中心に暮らしが営まれていたところ」という意味を根幹に持ち、古くは郷里の意味にかぎらずなじみ深い土地や古びて荒れた里をさした。

なじみ深さの視点が国レベルであれば①、個人レベルであれば②③④の意味になる。[6]

---

[4] 前掲書１　p.69

[5] 前掲書１　p.49

[6] 前掲書１　p.69

このように、古語から現代語にかけて意味が減り、主たる意味が変わる場合がある。

具体的な変化の過程は定かではないが、現代までに長い時間がたち価値観や生活環境が変化したことと、記録上の話者が増加したことも一因ではないだろうか。

言葉は生き物であるため、長い時間の中で人の生活や価値観の変化とともに多かれ少なかれ変化する。また、私たちは古典を通して古語を知るため、現在知りうる古語は、読み書きを学び、紙と筆を使えるような貴族等一部の者が用いていたものに限られる。そのため、識字率が上がり、筆記者が増えた結果、階級独特の視点や生活様式に基づく意味は衰退していく。

例えば、（３）「あやし」②（賤し）は、貴族階級にとって綺麗な状態が当たり前であり、みすぼらしく身分が低い状態がみなれないことによる。しかし、一般階級や貧しい生活をする者にとっては綺麗な状態は決して当たり前ではなく、むしろ貴族よりもみすぼらしい状態を見慣れている可能性が高い。そのため、言語の識字率が上がり、広く用いられ伝えられる中でみすぼらしいという意味は共感されず今に残っていないのだろう。

また、(9)「ふるさと」にも、貴族という身分に基づく視点が見られる。以前暮らしを営んでいたところという根幹の意味から、①の昔の都という発想になるのは、貴族の生活が都を中心に営まれていたからであろう。昔は、文字を用いて記録する上流階級が政治に近い位置にあったため、都に対する意識が強かった。その点で語意①は上流階級における個人レベルともいえるかもしれない。一方、土地に根付いて日々田畑を耕す農民にとっては、都の位置が変わっても支配者や流通経路が変わるだけで生活に大きな影響もなく、旧都への思い入れも少ない。また、当時は現代ほど交通手段が発達していないため、家を留守にすることは、生活拠点の移動に直結し得るため、②④の意味ができたのだろう。土地に根付く平民と異なり生活拠点を移動できる財力がある点からも貴族ならではの視点によるものかもしれない。

現代では、「ふるさと」という言葉は、単にかつて暮らしていた場所、というだけでなく、帰る場所としてのニュアンスも併せ持つ。また、現代においては移動手段の発展により、職場の移動は必ずしも居住地の移動を伴うものではなくなった。そのため、現代語では、幼少期を過ごした生家があるなじみ深い地域をさす。

もっとも、近年、転勤族や、都内のマンションに居住する人々が増えているため、ふるさとと思える場所がなかったり、実家の両親の現在の居住地と幼少期を過ごしたなじみ深い場所が異なったりする人も増えていくだろう。将来的には、ふるさとという言葉は、実の両親そのものや、彼らの現住所を指すようになるかもしれない。

このように、文化や生活習慣の違いから合わなくなった意味は消え、時を越えて共感しやすい精神的な意味は残ったのだろう。

これらの意味の減少により、元の意味から派生して生じた意味のみが現代では残っている場合、それも一つの文字通りの意味と慣習上の意味のずれといえるだろう。

イ　意味が変わったもの

（ア）メトニミーにより意味が変わったもの

例）

（10）あるじ（名詞）

古語：①（主・主人）

ア主人。主君。一家の長。また、主人役として客をもてなす人。

イ（比喩的に）熟達者。

②（饗）主人役として人をもてなすこと。ごちそうすること。饗応。

現代語：❶主人。

❷持ち主。

（11）ありがたし（有り難し）（形）

古語：①めったにない。まれである。珍しい。

②（①の意から転じて）優れている。りっぱだ。

③生きてゆくことがむずかしい。暮らしにくい。

④しにくい。むずかしい。困難だ。

⑤尊い。もったいない。

現代語：希少なものにあった時の感謝。

（12）ためらふ（躊躇ふ）（動詞）

古語：①（自動詞）はっきりした態度をとらず、ぐずぐずする。

②（他動詞）

ア心を静める。落ち着ける。

イ病状をやわらげる。静養する。

現代語：心が決まらず、ぐずぐずする。どうしようかと迷う。

（13）いかめし（厳めし）（形容詞）

古語：①おごそかである。威厳がある。

②りっぱである。盛大である。

③はげしい。きびしい。おそろしい。

現代語：（いかめしい）人におそれを感じさせるように重々しい。威厳がある。

（10）は、ごちそうとその提供者という近接性[7]により主たる意味が変化し（メトノミー）

---

[7] 前掲書１　p.112

現代語の意味になったのであろう。

（11）は、古語においては良くても悪くても珍しいこと（英語では rare の意）を指していた。（例　「ありがたきもの　姑にかわいがられるお嫁さん」（枕草子））現代語のように感謝の意で用いられるのは、江戸時代の元禄以後である。嬉しい珍しいことと、それに触れた時に抱く気持ちとの近接性により主たる意味が変化し（メトノミー）現代語の意味になったのであろう。（12）は養生することとその時に抱く気持ちとの近接性[8]、（13）は、「いかめし」なものとそれに触れた時の畏怖の気持ちの近接性[9]により主たる意味が変化し（メトノミー）現代語の意味になったのであろう。

（11）～（13）のように、その言葉が該当する状況とその際の心情の近接性に注目したメトノミーが発生する場合、その言葉がどの状況の近接性を切り取るかによって意味の方向性が変わる。思いがけず嬉しい思いをした場面を切り取った（11）「ありがたい」のように明るい意味になる場合や、（12）養生中のもどかしい場面を切り取った「ためらう」や、大きく立派なものに相対して畏怖する場面を切り取った（13）「いかめし」のように暗い意味になる場合もある。

（イ）当て字が変わり、それに伴い意味も変わったもの

伝言ゲームの際、伝わる言葉が変わることと同じ現象である。これは、民間語源にも関わり、時の流れが大きくかかわる意味のずれの典型である。

例）

（14）かたはらいたし（傍ら痛し）（形容詞）

古語：①そばで聞いたり見たりしているのもにがにがしい。いたたまれない。みっともない。

②（第三者として）気の毒である。心苦しい。

③（第三者に見聞きされて）きまりが悪い。恥ずかしい。

④（中世以降「片腹痛し」の字があてられるようになって）こっけいだ。笑止である。

現代語（片腹痛い）：こっけいで、見ていられない。

（15）あからさま（形容動詞）

古語：①にわかだ。突然。急だ。

②アちょっとの間である。しばらく。

---

[8] 前掲書１　p.20

[9] 前掲書１　p.114

イ（「あからさまにも」の形で、下に打消しの語を伴って）かりそめにも。まったく。

③あらわだ。明白だ。あきらか。ありのまま。

④かりに。その場しのぎに。

現代語：かくさずに、ありのままあらわしてしまうようす。ことばや態度にはっきり出す様子。

（16）いとほし（形容詞）

古語：①かわいそうだ。気の毒だ。ふびんだ。

②いやなものとしてきらうさま。いとわしい。いやだ。不快だ。

③かわいい。いとしい。

現代語：（愛おしい→愛しい）❶だいじにしてかわいがりたい気持ちだ。

❷気の毒でいじらしい。

（17）かはゆし（形容詞）

古語：①（「顔映ゆし」の転）はずかしい。おもはゆい。

②かわいそうで見ていられない。ふびんだ。気の毒だ。

③愛らしい。かわいらしい。いとしい。

現代語：（可愛い）❶小さくてほほえましい。愛らしい

❷愛情や、大切にする気持ちをもたずにいられない。いとしい。

（14）は、元々は傍らにいて苦痛を感じるほどに見ていられない、という意味であり、その場面の当事者か傍観者か等の視点の違いから①②③の意味が生じた。もっとも、④にあるように「かたはら」に誤って「片腹」の字があてられるようになり、笑いすぎておなかが痛くなることと重なって意味が変わった。[10]

（15）は、上代や中古の頃「あから」が「少しの間」という意味であることから①②の意味を有していた。もっとも、近世以降「明から様」の字があてられて字の連想により明らかな様子を指すようになり、意味が変わった。[11]

（16）は、元々は可哀想で見ていられない心情をさしており、見ることを厭うほど弱く気の毒な者に同情することから「厭し（い）」の字であった。そのため、①②はネガティブな語意である。もっとも、「愛し（い）」の字があてられるようになり、現代においては③❶❷にあるようにポジティブな意味に変化した。

（17）「いとほし」の①③の意味と「かはゆし」の②③に意味は共通している。どちらも

---

[10] 前掲書１　p.33

[11] 前掲書１　p.106

気の毒で、かわいそうな弱者に対する同情の気持ちから、そんな弱者に対する情愛の気持ちへと変化したのだろう。また、現代語において「かわいそう」という言葉は弱いものを憐れんで保護したくなる気持ちという意味を持っており、これは「かはゆし」の②に近い。このことから、「かわいい」と「かわいそう」は、音のみならず意味の根幹が類似しており、時代を経て言葉が沸かれたのではないかとも考えられる。

このように、字の変化に関係する主たる意味の変化としては、(14)(15)のように新旧の意味に特につながりがなく単純に漢字の変化に伴って意味が変化したものもあるが、(16)(17)のように新旧の意味に繋がりが見られ意味も漢字も変わったものもある。前者の場合、音以外新旧の意味に目立った共通点はなく、まさしく伝言ゲームのような過程を経た意味変化といえるだろう。この場合、時の経過による生活習慣や文化の変化は決定的な要因ではないようだ。

(ウ)細分化されていた意味が一つの語義に集約されてより広い範囲をさすようになったもの

以下では、右矢印(⇒)を挟んだ左側が古語であり、右側が現代語である。

例)

(18)かたはらいたし:いたたまれないほどみっともなくて
かはゆし:(顔映ゆし)おもはゆく、気の毒で
はづかし:相手が立派で自分が劣っていて　⇒　はずかしい[12]
まばゆし:目をそむけたくなるほどに照れくさく

(19)うつくし:客観的に小さいものの可憐な美しさ
(英語の little,lovely,pretty に相当する)
らうたし:(主観的に)かよわくて守ってあげたくなる　⇒　かわいい
をかしげなり:手元において称賛したくなる

(池田修二「ビジュアル図解　古文単語」(学研教育出版、2011年)　38ページより)

1

このように、細分化されていた意味が一つの語義に集約されることにより、語彙は減少し、細やかなニュアンスが表現しにくくなってしまう。しかし、一つの言葉でより多くの意味を表現でき、多くの場面に対応できるという点ではより効率的であり、記憶の容量に資する。

---

[12] 前掲書1　p.38

現代語から若者言葉にかけてもこのような変化はみられる。

例えば、「かわいい」という形容詞は、辞書には先述の通り２つの意味しか掲載されていない。しかし、令和元年９月のクールジャパン戦略という政策により世界に「kawaii」文化を発信しようとする追い風と相まって、現在、「かわいい」の慣用的な意味は多様化している。

辞書通りの小さくか弱いものはもちろん、幼いもの、拙いもの、綺麗なもの、上品な者、pop なもの、cute なもの、lovely なもの、cool なものに対しても、おじさんにすら、心がときめいたり好意的な感情を抱いたりした場合には「かわいい」という言葉を用いる。目上の人や神仏に対しても、マニアックな好みであろうが、自分がときめけばそれは「かわいい」のである。

例）ひよこがかわいい。
卒業式に慣れない合唱を披露してくださる先生方がかわいい。
目が覚めるような色使いの服がかわいい。
童顔な 20 代の若手俳優がかわいい。
輝く豪華なシャンデリアがかわいい。
ゆっくりとした所作の高齢の先生がかわいい。
いつもはしっかりしている上司に抜けているところがあってかわいい。
好みに合うスタイリッシュな包丁がかわいい。
好みに合うデザインのギターがかわいい。
奈良の大仏がかわいい。
しわくちゃな顔をした一見気持ち悪いキャラクターがかわいい。

ウ　特定の状況において慣用的な意味を持つもの

シネクドキーの一例ともいわれるが、短歌・俳句における「花」とは、慣用的に「桜」を意味する。現代でも、「花見」「花筏」「花吹雪」と言った時、「花」は「桜」のみをさす。

例）久方の光のどけき春の日にしずこころなく花の散るらむ

また、お寿司屋さんで「むらさき」といったら「醤油」、「あがり」といったら「お茶」、「おあいそ」といったら「お会計」を指すように、業界特有の表現もある。

英語でも、「Make my day」という表現において day とは単なる一日という意味ではなく、good day（いい日）との意味を持つ。

辞書には掲載されていないが、最近でもこのような意味のズレはある。たとえば、「行けたら行く」という表現は、文字通りの意味は「行くことが可能であったら行く」という条件付きで行く可能性を示すものであるが、慣用的には、行く気がない時や、行かない時の体のいい断り文句として用いられている。それに伴い、文字通りの意味を伝えたい場合は、本当に行けるかどうか難しい事情や、行きたいと思っていることを相手に詳しく伝えるように

なった。

3　言語間の意味のずれ

文字通りの意味と、慣例上の意味のずれは、異なる言語間でも見て取ることができる。

先ほどと同様の文字通りの意味が同じでも慣例上の意味が異なる例としては、たとえば、英語の butterfly in stomach、タガログ語の kilig はどれも胃の違和感を表す表現である。

「butterfly in stomach」は、そわそわして落ち着かない・胃がキリキリするという意味をもっている。

これに対し、「kilig」は「おなかの中に蝶が待っている気分。たいてい、ロマンチックなことや、素敵なことが起きたときに感じる。きっとあなたもご存知でしょう。ひとたびこの気分になると、まともにものが考えられず、どんなことにも微笑んでしまうし、胃の奥の方からわくわく感がこみあげてきます。」(エラ・フランシス・サンダース　(前田まゆみ訳)『翻訳できない世界のことば』(第一版、2016 年、創元社) pp.20～21) という意味を持つ。

同じ胃の中に蝶がいて羽ばたいているような触感を用いた比喩表現であるが、英語では不快な感覚でありネガティブな意味を持つのに対し、タガログ語ではロマンチックでわくわくする感覚というポジティブな意味になっている。

同じ文字通りの意味を持つ言葉でも、慣習上の意味が真逆なのである。国民性ゆえだろうか。

ア　朝の挨拶

逆に、同じ慣習上の意味を持つ言葉でも、文字通りの意味が異なるものもある。

おはようございます(日本語)、good morning(英語)、guten Morgen（ドイツ語)、buenos días（スペイン語）は、どれも慣例上、朝にする挨拶という意味を持っている。しかし、日本語の「おはようございます」は、文字通りの意味は「早い時間ですね」である。お早い時間から活動してお疲れ様です、という元の言葉が省略された結果、文字通りにみると早い時間であることしか意味を持たないのである。

一方、good morning(英語)、guten Morgen（ドイツ語)、buenos días（スペイン語）は、文字通りの意味はどれも「良い朝（日)」である。良い朝・良い日であると思い、相手にとってもそうであることを願っているのである。

J.R.R. TOLKIEN の「THE HOBBIT」おいても、魔術師ガンダルフが「good morning」と挨拶してきた主人公ビルボに対して意地悪にもその言葉の意味を訪ねる場面がある。

—*"What do you mean?' he said. "Do you wish me a good morning, or mean that it is a good morning whether I want it or not; or that you feel good this morning; or that it is a morning to be good on?"*

"All of them at once,' said Bilbo. "And a very fine morning for a pipe of tobacco out of doors, into the bargain. If you have a pipe about you, sit down and have a fill of mine! There's no hurry, we have all the day before us!' —
(J.R.R. TOLKIEN『THE HOBBIT』2006年, *Harper Collins Publishers*) p. 6)

日本語において good morning 等のように良い朝であることを願う挨拶は、「ごきげんよう」が該当する。日常的に広く用いられる挨拶ではないが、相手の心身のご機嫌を伺うとともにご機嫌が良いことを願う意味を持つ。もっとも、「ごきげんよう」は「good morning」等と異なり時間の制約なく用いることができる上に、身分の高い人のみが使用するような印象があるため、完全に置き換えることはできない。

こうしてみると、同じように朝の挨拶としての慣用的な意味をも持つ言葉でも、言語によってそれぞれ文字通りの意味とはズレがあることと、それに伴い、文字通りの意味にもともと込められていた思いが異なることがわかる。

イ　謝罪表現

挨拶だけでなく、謝罪表現にも文字通りの意味と、慣例上の意味のずれを見て取ることができる。

英語の謝罪表現には、主に「sorry」「excuse me」「I beg your pardon」「I apologize」の４つが挙げられる。いずれも慣用的に謝罪の意を表す表現である。

文字通りの意味は「sorry」は心が痛む（sore)、「excuse me」は私に言い訳をさせてほしい、「I beg your pardon」は許しを請い願ってもいいですか、「I apologize」は私は謝罪する、である。

Sorry と I apologize は自身の状態について述べているが、それ以外は相手からの反応や自身の言い訳を述べるなど、謝罪のあとの行動が予定されている。非がなければ謝罪せず、自らの意見をきちんと主張する価値観が透けて見える気がする。

先ほど引用した THE HOBBIT において、軽い謝罪のつもりで「I beg your pardon」と言ったビルボに対して、ガンダルフが文字通り許しを与える会話が見られる。言葉を操る魔術師であるガンダルフらしい言葉遊びが見られる場面である。

—*"I beg your pardon, but I had no idea you were still in business."*
"Where else should I be?" said the wizard. "'All the same I am pleased to find you remember something about me. You seem to remember my fireworks kindly, at any rate, and that is not without hope. Indeed for your old grandfather Took's sake, and for the sake of poor Belladonna, I will give you what you asked for."
"I beg your pardon, I haven't asked for anything!"'

"Yes, you have! Twice now. My pardon. I give it you.—
(J.R.R. TOLKIEN『THE HOBBIT』2006年, *Harper Collins Publishers* pp.8~9（下線は引用者）

一方、日本語の謝罪表現は、主に「ごめんなさい」「すみません」「失礼いたしました」「申し訳ございません」「お詫び申し上げます」の５つがあげられ、おおむね挙げた順に親しい間柄の軽い謝罪表現から正式な謝罪表現となる。
文字通りの意味は、「ごめんなさい」は罪や罰を免れさせて許してください、「すみません」はこのままでは終わらない、「失礼いたしました」は礼儀を失しました、「申し訳ございません」は言い訳の余地がない、「お詫び申し上げます」は謝罪を述べる、である。

「ごめんなさい」のみ相手の許しという反応を求めているが、それ以外は自分が行った行為の説明や状態を表しているだけである。相手からの許しを求めず、自分の言い訳を続けて述べようともしていない。それが、日本においては言い訳がましくなく潔いとして評価され、「ごめんなさい」が幼く親しい者の間でのみ許される表現なのだろう。

４　まとめ

以上見てきたように、日本語内部の歴史的変遷における意味の変化と、個別言語間での同義語と思われる表現間語源からの意味のずれには、人間の言語生活を形成する文化的・社会的な要因が深く関わっていることが分かる。こうしたずれは言葉が使われていく中で必然的に生じるものであり、現代語において文字通りの意味は少なく、ほぼ全ての意味が慣習上の意味なっているといえるだろう。

言葉は人間の営みと密接不可分であるため、日本という同じ国の中でも、時間を経て文化が変わり、社会制度が変わり、言葉が広まり、書き間違いが起き、言葉の意味も変わっていく。これからも言葉の意味は変化し続けるだろう。

現在では義務教育が定着し階級制度も無くなっているため、特定の身分の視点に基づく意味の喪失（（３）（９）など）は今後起こりにくいかもしれない。

しかし、お寿司屋さんなどでみられるような職業ごとの専門用語は、人口減少に伴う後継者不足で今後喪失する可能性もある。逆に、寿司職人ではなく一般の顧客にも業界用語が浸透してきているため、業界用語が日常会話に登場するようになるかもしれない。近年見られる個人の多様な生き方を許容する風潮から、PC表現が創出され、従来の言葉が消えるかもしれない。（保母さん→保育士さん、スチュワーデス→CA、父母会→保護者会）奥さん、家内という呼び名を嫌がり、より対等にパートナーと呼ばれたがる女性も増えてきているようである。カタカナ語や外国語も頻繁に日常会話に登場するようになっているため、語彙が増えてより繊細な表現ができるだけでなく、日本語の意味が影響を受けて変化したり、カタカナ語が今の日本語に置き換わったりするかもしれない。例えば、気候変動と相まって驟雨や夕立とゲリラ豪雨の区別がつきにくくなっていたり、居間をリビングと呼ぶようになっ

たりしている。これらの言葉が統合する日も近いかもしれない。

そして、それぞれの言語の話者により国や言語・文化・社会制度・国民性・宗教が違うことから、これから世界がいかに変わろうと完全に同じことを同じニュアンスで伝えることは難しいかもしれない。しかし、その言語を用いるのはあくまでも人同士であるため、今回見た挨拶や謝罪以外でも、人間の言語生活として共通する部分は多いだろう。

人間が言葉によって世界を認知し思考するからこそ、反対に言葉によって完璧に表現できない思いもまた、時代・世界を越えて人の胸のうちで共通しているのかもしれない。変化していく人の営みの共通点・相違点を、言語の意味変化とともにこれからも注目していきたい。

＜参考文献＞

大野進、田中章夫（編）『角川　必携国語辞典』（角川書店、平成 17 年 12 月 10 日）

日野資成『ベーシック現代の日本語学』（ひつじ書房、2009 年 4 月 10 日）

瀬田幸人、保坂靖人、外池滋生、中島平三（編著）『[入門] ことばの世界』（大修館書店、2010 年 12 月 10 日）

池田修二『ビジュアル図解　古文単語』（学研教育出版、2011 年）

松村昭、山口秋穂、和田利政（編）『旺文社　古語辞典　第十版』（旺文社、2011 年）

大津由紀雄『ことばワークショップ－言語を再発見する－』（開拓社　2011 年 6 月 14 日）

『Oxford Advanced Learner's Dictionary　9th edition』（OXFORD UNIVERSITY PRESS、2015 年）

エラ・フランシス・サンダース（前田まゆみ訳）『翻訳できない世界のことば』（創元社、2016 年）

池上嘉彦『英語の感覚・日本語の感覚〈ことばの意味〉のしくみ』（NHK 出版　2018 年 12 月 15 日）

『ジーニアス英和辞典　第 5 版』（大修館書店　2019 年）